

私と渡辺先生

尾 登 一 信

渡辺先生と始めてお付き合いのあったのは私が教育委員会の社会教育課文化係長の時でした。大分県文化財保護審議会に御出席になり、その時の印象としては、「何だか気むずかしい先生」という感じだったと思います。

当時の文化財保護行政は、社会教育課の中の文化係で、係長以下三名という状態。現在の文化課の陣容と比べて、雲泥の差といったところでしたが、大分県史料の編纂は完成に近づき、早生水台や丹生遺跡の発掘調査も、全国的な権威を集めて実行に移された時代でした。橋本操六氏と二人、オンボロの単車で走り廻っておりましたが、渡辺先生をはじめ各方面の御指導、御援助がなければとても出来ることはありませんでした。

それからしばらく学校現場を転々として、再び文化課長として帰って来た時には、それなりに組織も充実して、国分寺跡や岡城址の問題、宇佐風土記の丘歴史民俗資料館の建設等で、文化財保護審議会会長として、御助言を受けました。

私が地方史研究で、直接御指導を受けるようになったのは、現職を退いて、思いがけないことから近世文書にとりついた時からのことです。

若い研究発表者について、真正面から、齒に衣をきせず、適切な御指導をなさる、若々しい情熱に、傍らから圧倒されて拝聴したものでした。

かくれたエピソードを一つ紹介すると、それは私が先生と一緒に観世流の謡曲を習っていた時のことです。

大まじめに稽古されていましたが、無本（謡本を見ない）で発表するように言われ、「そんなことが出来るか」と子どもみたいに腹を立てて、辞められ、それでも私と合う度に「まだ、やりよるかい……」と言われるのが挨拶がわりでした。本当に純真無垢、子どものようなところがありました。祈御冥福。